



2023 (令和5年) 年12月8日 (金) 発行

〔発行所〕 応用生態工学会事務局 〒102-0083 東京都千代田区麹町4-7-5 麹町ロイヤルビル405号室

TEL : 03-5216-8401 FAX : 03-5216-8520 E-mail : eces-manager@ecesj.com HP : <https://www.ecesj.com/>

〔発行者〕 応用生態工学会 (編集責任者: 幹事長 天野 邦彦, 事務局長 佐藤元樹)

1	はじめに	1
2	応用生態工学会第27回総会報告	2
3	応用生態工学会第26回京都大会報告	13
4	2023年度海外学会参加報告	36
5	行事開催報告	
5-1	連続セミナー 第9回「未来の環境を語り・考える会」開催報告	40
6	理事会・幹事会等 報告	41
7	2023年度行事経過と今後の予定	42
8	事務局より	43

1 はじめに

今号では、第27回総会報告、第26回京都大会報告、2023年度海外学会参加報告、各地の活動状況など、学会の動きをお伝えします。

第27回総会報告を掲載しました

総会における審議事項、報告事項とともに主な意見等も記載し報告します。

応用生態工学会第26回京都大会報告を掲載しました

今年の応用生態工学会第26回大会は、9月20日(金)～23日(土)に京都大学東宇治キャンパスにおいて開催されました。開催内容を報告します。

2023年度海外学会参加報告を掲載しました

2 応用生態工学会第 27 回総会報告

報告者:佐藤元樹 応用生態工学会事務局

第 27 回応用生態工学会総会は、第 26 回全国大会において 2023 年 9 月 22 日(金) 10 時 10 分～12 時に京都大学宇治キャンパス黄檗プラザきはだホールで開催された。

総会は事務局長から、学会規約第 15 条 4 項による総会成立要件(正会員の 5 分の 1 の出席)を満たしていることが報告され、総会議長に株式会社大林組顧問の藤田乾一氏を選出して、総会が開始された。以下に、概要を報告する。

占部会長挨拶

対面での学会が開催できたことをとても嬉しく思います。大会実行委員長をはじめ実行委員の皆様感謝とお礼を申し上げたい。懇親会も楽しいものだった。ポスター発表、口頭発表等もとても活発な議論がなされ充実したものであると感じた。ひとえに会員の皆様の日ごろの研究への取り組みの成果が表れたものと思う。

今回の総会では重要な案件がある。すなわち法人化に向けて一步を踏み出すことである。学会の位置づけを明確にするとともに、会員の社会的な立場も明確にするものである。活発な議論を願いたい。

占部城太郎会長の挨拶の後、議事に入り第 1 号～第 6 号議案の審議を行い、すべて原案通り可決された。

第 1 号議案 2022 年度（令和 4 年度）決算・監査報告

1. 2022 年度決算は、故廣瀬利雄氏からの遺贈金があったことから例年と異なる決算金額となっている。

決算報告については「寄附金口金額(126,377,510 円)」を除き、通常の学会活動について決算書を作成し報告することとした。なお、財産目録、貸借対照表には寄付金口金額を含む全体額を示している。

2. 2022 年度決算は、収支差額 2,291,417 円の赤字となった。この赤字決算をもたらしたのは、執行見込み額が見直し時に 2,193,930 円の支出超過だったこと、収入決算額が執行見込み額に対し 59,394 円の増額だったものの、支出決算額も 156,881 円の増額であったことによる。
3. 収入決算額が 59,394 円の増額となった要因は次のとおり。

【減額となった主なもの】 単位:円

費目	執行見込み額	決算額	減	理由
会費収入	11,946,000	11,705,650	240,350	年度末正会員 46 名の減
地域講座参加費	1,100,000	337,870	762,130	地域講座の減
英文誌関連収入	325,600	61,520	264,080	購読者数の減
小計			1,266,560	

【増額となった主なもの】 単位:円

費目	執行見込み額	決算額	増	理由
遺贈金事務費収入	0	1,000,000	1,000,000	遺贈金の一部を事務費とした
雑収入	360,070	636,024	275,954	会誌別刷り収入の増
小計			1,275,954	

4. 支出決算額が 156,881 円の増額となった要因は次のとおり。

【減額となった主なもの】 単位:円

費目	執行見込み額	決算額	減	理由
地域イベント助成費	700,000	250,000	450,000	地域イベントの減
地域研究会費用	1,400,000	961,612	438,388	開催規模、開催日数の減
Hp 整備費	600,000	0	600,000	新規の整備が無かった
小計			1,488,388	

【増額となった主なもの】 単位:円

費目	執行見込み額	決算額	増	理由
管理費	7,000,000	8,000,287	1,000,287	事務局用 PC 購入、遺贈金事務費
会誌編集費	4,500,000	4,881,035	381,035	印刷費、送料等の増
理事会費	250,000	713,197	463,197	ELR 立替費 40 万円
小計			1,844,519	

5. 以上の状況を概括すると、2022 年度 2,291,417 円の赤字は、会員数の減少、コロナ感染の影響による地域講座の減、英文誌購読者数の減などによる収入金額の減少に加え、事務局 PC 整備、ELR つくば立替費などの支出金額の増額が原因と考える。

また、2021 年度の会誌 Vol No2 に係る費用の未払い分(2,253,798 円)を 2022 年度に支出したことも赤字の要因である。

なお、会誌未払い分を除くと 2022 年度決算は概ね収支均衡していると考えられる。

第 2 号議案 第 14 期役員選出

1) 第 14 期役員候補の募集・推薦に係る経過報告

【2023 年 2 月 28 日】 第 121 回理事会において、以下のとおり、次期役員募集・推薦委員会の委員長と委員を指名しました。

委員長：占部城太郎会長、委員：甲村謙友前会長、江崎保男元会長、辻本哲郎元会長

【2023 年 4 月 13 日】 第 1 回次期役員募集・推薦委員会

次期役員候補の募集、総会を経て、次期役員が決定されるまでの手順、スケジュールを確認しました。また、次期役員候補募集の公示文について決定しました。

【2023 年 5 月 23 日】 会員メーリングリストで次期役員候補募集を周知しました。

【2023 年 5 月 26 日】 ホームページに次期役員候補募集公告を掲載しました。

【2023 年 5 月 26 日】 ニュースレター101 号に次期役員候補募集公告を掲載しました。

【2023 年 6 月 1～30 日】 次期役員候補募集期間

募集期間内に、会長候補 2 名、副会長候補 2 名、理事候補 15 名の計 19 名の届け出がありました。

【2023 年 7 月 6 日】 第 2 回次期役員募集・推薦委員会

募集期間内に提出のあった候補届出書 19 通について、候補者、推薦人の要件を満たしていることを確認しました。届出のあった副会長候補 2 名、理事候補 15 名の 17 名を候補として推薦することを決定しました。

会長候補の届出数が、学会規約第 10 条に規定する人数の範囲を超過したことから審議を行い、次期役員募集・推薦委員会規程第 4 条に則り、1 名の候補者を推薦しました。なお、会長候補に関しては、2 通の届出のうち、1 通が当委員会の委員長を推薦するものであったため、会長候補者の推薦についての審議は、委員長を除く 3 名の委員により行われました。

副会長候補については、届出による候補者が 2 名であったため、定数上限 3 名との差 1 名について、委員会として候補者を推薦しました。

監事候補については、届出による候補者がなかったため定数 2 名との差 2 名について、委員会として候補者を推薦しました。

【2023 年 8 月 9 日】 ニュースレター102 号、ホームページにより、会員へ次期役員候補を周知しました。

【2023 年 9 月 4 日～14 日】 総会の議事及び議事に対する賛否、意見を表す回答書様式を一斉配信、ホームページへの掲載にて正会員に周知しました。このフォームを用いた回答、または FAX、郵送いずれかによる役員候補の信任投票を実施しました。

2) 第 14 期役員候補者

学会規約第 11 条、第 12 条及び第 14 条および規約細則第 5 条並びに「次期役員募集・推薦委員会規程」に基づいて推薦される第 14 期役員の候補者は次のとおりである。

〔次期会長候補：1 名〕(敬称略)

占部城太郎(再任) 東北大学大学院生命科学研究科教授

〔次期副会長候補：3 名〕(再任・新任の順、五十音順、敬称略)

清水 義彦(再任) 群馬大学大学院理工学府教授

東 信行(新任) 弘前大学農学生命科学部生物学科教授

藤田 光一(新任) 国立研究開発法人土木研究所理事長

〔次期理事候補：15 名〕（再任・新任の順、五十音順、敬称略）

赤松 良久（再任） 山口大学大学院創成科学研究科教授
沖津 二郎（再任） 応用地質株式会社地球環境部応用生態工学研究所所長
北村 匡（再任） 共和コンクリート工業株式会社取締役副社長
関島 恒夫（再任） 新潟大学農学部農学科教授
平井 秀輝（再任） 一般財団法人水源地環境センター理事長
柳川 晃（再任） いであ株式会社社会基盤本部特任理事水源地統括
渡邊 康玄（再任） 北見工業大学工学部社会環境系教授
小俣 篤（新任） 公益財団法人河川財団業務執行理事
片野 泉（新任） 奈良女子大学研究院自然科学系教授
佐藤 高広（新任） 株式会社復建技術コンサルタント環境部部长
島村 彰（新任） 株式会社建設環境研究所大阪支社取締役支社長
西廣 淳（新任） 国立研究開発法人国立環境研究所気候変動適応センター副センター長
光成 政和（新任） 一般財団法人日本ダム協会専務理事
吉田 丈人（新任） 東京大学大学院農学生命科学研究科教授
吉村 千洋（新任） 東京工業大学環境・社会理工学院教授

〔次期監事候補：2 名〕（再任・新任の順、敬称略）

西 浩司（再任） いであ株式会社国土環境研究所環境技術部技師長
鳥居 敏男（新任） 一般財団法人自然公園財団専務理事

【主な意見】

- ・会長候補 2 名から 1 名とした選任の経緯についてルールに則って決定したことは理解した。

第 3 号議案 第 14 期幹事長選出

幹事長（1 名）は、学会規約第 13 条第 1 項の規定に基づいて、「理事会の推薦により総会において正会員の中から選出される」こととされている。

理事会から、第 14 期幹事長として、以下の候補を推薦する。

なお、副幹事長は、学会規約第 13 条第 5 項の規定に基づいて、「幹事会の推薦により、会長が任命する」こととされている。

〔幹事長候補：1 名〕

天野 邦彦（再任） 公益財団法人河川財団河川総合研究所長

第 4 号議案 一般社団法人への移行案

以下の通り、現在任意団体である応用生態工学会を、一般社団法人に移行することを提案します。

【総会に諮る内容】

下記【提案の契機】に示す、学会財産の管理の適正化の必要性および法人化の利点を踏まえて、現在任意団体である応用生態工学会を、一般社団法人に移行することの可否について決議いただきたい。

主要な前提は以下の 4 点です。

- 1) 次ページ以降に添付する「一般社団法人応用生態工学会 定款（案）」、以下「定款（案）」に基づき移行手続きを進めるとともに、法人化後は定款（案）に基づいた学会運営を行う。
- 2) 法人化に向けて、定款（案）についての意見聴取（会員を対象とするパブコメ）を 14 期役員の下で一定期間実施するとともに、弁護士による最終確認を経て登記を行う。
- 3) 定款（案）は、現在の学会規約の踏襲を前提に、一般法人法に従い作成している。
- 4) 現在の学会規約に基づく規約細則は新たな細則として承継するとともに、委員会規程については、定款（案）の文章体裁に合わせて内容を承継することとする。

添付する定款（案）を踏まえて、本議案を検討いただく際の参考として、現在の学会規約と定款（案）との比較表も添付します。定款（案）は、現在の学会規約の踏襲を基本としていることから、法人化後も学会の運営が大きく変わることはありませんが、一般法人法に従い、変化する事項があります。特に確認いただきたい項目として、以下の 5 つがあります。

- i) 役員は理事および監事となり、理事（25 名以内）のうち、代表理事として会長 1 名、業務執行理事として副会長 3 名、専務理事 1 名を選ぶことになります。なお、専務理事の多くの業務は、現在の幹事長の業務に対応するものと想定しています。
- ii) 理事および監事は社員総会の決議により選任され、会長、副会長、専務理事は理事会で選定されることとなります（従って、次期役員募集・推薦委員会は、会長、副会長、理事の区別をせず理事として募集することとなります）。
- iii) 総会の成立要件として、法人の社員総会は正会員の 1/2 以上の出席が必要となります（現在は正会員の 1/5 以上の出席が必要）。
- iv) 名称としては無くなる幹事会の機能は、総務委員会（仮称）に承継します。
- v) 事業年度は、7 月 1 日から 6 月 30 日に変更となります（事業年度終了後 3 か月以内に社員総会を開く必要があるため）。

（以下は参考情報）

【提案の契機】

本件については、令和 4 年 4 月にご逝去された廣瀬利雄元会長のご遺産の一部を、廣瀬元会長のご遺志により応用生態工学会に寄贈したいとのご連絡を、同年 9 月にご遺族より受けたことを契機の一つとして検討を開始したものです。ご遺贈いただいた金額は約 1 億 2,700 万円と大変高額であり、任意団体のままだと、2 千万円弱の年間予算（現在の資産合計は約 3,300 万円）に遺贈金が追加される大金を、個人名（会長や事務局長）で管理せざるを得ないため、名義人に事故があった場合等、管理に支障を生じる可能性があり、結果として大変な負担が個人にかかっています。法人化することにより、法律行為を団体名義

で行うことができるようになるため、このような事態を回避することができるようになります。この他にも、定款等を整備し、一般社団法人化することで、寄付などを受けやすくなること、業務の受委託を法人として実施できること、学会が行う事業の社会的信頼が得られること、公的業務等において、会員の学会誌掲載論文が、評価の加点要素となる可能性があること等が、法人化の利点として挙げられます。

【提案の経緯】

上記に鑑みて、第 121 回理事会（2023 年 2 月 28 日開催）において、法人化検討を推進することが承認され、第 123 回理事会（2023 年 6 月 21 日開催）および第 125 回理事会（2023 年 8 月 31 日開催）での審議を経て、理事会で承認された定款（案）が作成されたところです。なお、理事会における審議を円滑かつ迅速に進めるために、法人化に関する論点を検討するとともに整理を行う法人化・遺贈金使途 WG を理事会の承認（第 121 回理事会）により別途設置しました。当該 WG においては、6 回の審議を行いました。

【法人化の条件】

一般社団法人の設立に際しては、「一般社団法人及び一般財団法人に関する法律（以下、一般法人法）」に従う必要があります。一般法人法第 10 条で、一般社団法人を設立するには、定款を作成する必要があること、また第 22 条で、一般社団法人は、その主たる事務所の所在地において設立の登記をすることによって成立する、と規定されています。

【定款の位置づけ】

定款（案）は、現在の学会規約の踏襲を前提とし、一般法人法に従い作成されました。また、規約細則を新たな細則として承継するとともに、委員会規程については、定款の体裁に合わせて内容を承継することとしています。

【法人化に伴う会員の地位】

一般社団法人への移行に際しては、会員は一般社団法人への移行に伴い、現在同様の立場で一般社団法人の会員となります。

第 5 号議案 2024 年度（令和 6 年度）事業計画案

第 6 号議案 2024 年度（令和 6 年度）予算案

2024 年度予算案は、引き続き収支を一致させる均衡予算とすることを基本に作成した。

収入と支出のそれぞれについて、予算案の考え方は次のとおりである。

また、故廣瀬利雄氏からの遺贈金は別途基金として運用を検討しているため、通常の学会活動費としては計上していない。

○収入

- ① 会費収入は、2023 年 6 月 30 日時点の会員数に基づいて計上した。
- ② 事業収入の大会費については、2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。

- ③ 助成金収入の河川基金については、2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。また、その他の助成金については、コロナ感染の影響が収まったことから、2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。
- ④ 次の科目については、以下のとおり計上した。
 - ・雑収入の会誌別刷り収入は、2021 年度・2022 年度決算の平均額を計上した。
 - ・会誌等販売収入は、2022 年度の実績額を計上した。
- ⑤ 事業収入の地域講座参加費については、コロナ感染の影響が収まったことから、感染拡大前の 2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。
- ⑥ 英文誌 LEE 購読料収入は ICLEE 国内運営委員会の方針が「2023 年度より LEE の個人購読料を無料とし、ICLEE 構成学会の学会員全員が LEE 誌を講読・投稿可能」になったため、冊子体希望者のオンデマンド印刷料のみ計上した。

○支出

- ① 管理費については、2023 年度予算額と同額に加え会員管理システムの維持費を計上した。
- ② 会誌編集費は 2019 年度・2020 年度決算の平均額を計上した。
- ③ 会議費のうちの総会費は、2023 年度予算と同額を計上した。
理事会費、幹事会費は、Web 会議多用の情勢を鑑み、年 1 回（全委員出席）の開催として計上した。
- ④ 委員会活動費は、次のとおりとした。
 - ・普及・連携委員会費は、活動費・地域イベント助成費については、2023 年度予算と同額を計上した。
 - ・国際交流委員会費は、国際シンポジウムの開催年ではないため、国際シンポ経費は計上しない。
 - ・情報サービス委員会費は、活動費、ホームページ管理費とも、2023 年度予算と同額を計上した。
 - ・将来構想委員会費は、2023 年度予算と同額を計上した。
 - ・技術援助委員会費は、2017 年度～2022 年度同様、ゼロ計上とした。
 - ・テキスト刊行委員会費は、活動費については「水田環境」テキストの会議費用等を考慮し、2023 年度予算と同額を計上した。
 - ・企画運営委員会は、連続セミナー開催費(1 回分)を計上した。
 - ・海外派遣費は、毎年度と同額の予算を計上した。
 - ・災害調査団派遣に伴う災害調査費については、当初予算はゼロ計上であるが大規模災害が発生し理事会において災害調査団派遣が決定された場合は、一調査団当たり 100 万円程度までの範囲で災害調査費を予算措置できることとする。
- ⑤ 大会費は、現地単独開催を行った 2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。
- ⑥ 地域研究会費用は、2018 年度・2019 年度決算の平均額を計上した。
- ⑦ HP 整備費は、ホームページの整備費用として、2023 年度執行見込額と同額を計上した。
- ⑧ その他費用は、事業費の中で他項目以外に突発的に発生する費用（ただし、災害調査の費用を除く）に対応する予算科目として、予備的経費を計上することとしている。Web 対応に必要な Zoom ライセンス料と当期収支差額が 0 円となる範囲で、可能な金額を計上した。
- ⑨ 英文誌関連費の LEE 購読料支払いは、収入額と同額とした。ICLEE 事務局維持費は、必要額を計上した。

以上により設定した結果、2024 年度予算案は、収入、支出ともに 18,947,920 円、収支差額 0 円の均衡予算となっている。

科 目	2024年度		2023年度		2022年度	2021年度
	予算(案)	設定根拠	予算	執行見込額	決算	決算
収 入	18,947,920		18,937,880	18,947,880	14,341,064	18,406,506
会費収入	12,006,000		11,946,000	12,006,000	11,705,650	14,062,110
正会員会費	5,178,000	863人×6,000(2023/6/30現在)	5,292,000	5,178,000	4,931,650	5,396,440
学生会員会費	228,000	114人×2,000(2023/6/30現在)	154,000	228,000	174,000	166,000
賛助会員会費	6,600,000	66口×100,000	6,500,000	6,600,000	6,600,000	8,499,670
雑収入	450,120		450,080	450,080	636,024	407,901
会誌別刷り収入	450,000	2021・2022年度決算の平均額を計上	450,000	450,000	560,450	329,890
受取利息	120	2021・2022年度決算の平均額を計上	80	80	154	77
その他	0		0	0	75,420	77,934
事業収入	4,083,000		4,133,000	4,083,000	437,870	3,399,085
大会費	2,783,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	2,783,000	2,783,000	0	2,135,000
大会(研究発表会)参加費	2,000,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	2,000,000	2,000,000	0	2,089,000
エクスカーション参加費	33,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	33,000	33,000	0	1,000
大会(懇親会)参加費	750,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	750,000	750,000	0	0
大会(企業展示)参加費	0		0	0	0	45,000
地域講座参加費	1,200,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,200,000	1,200,000	337,870	377,585
会誌等販売収入	100,000	2022年度実績額を計上	150,000	100,000	100,000	886,500
英文誌関連収入	8,800		8,800	8,800	61,520	317,410
LEE購読料	8,800	冊子希望者2冊分を計上	8,800	8,800	61,520	317,410
LEE広告掲載収入	0		0	0	0	0
助成金収入	2,400,000		2,400,000	2,400,000	500,000	220,000
河川基金	1,000,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,000,000	1,000,000	0	0
助成金	1,400,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,400,000	1,400,000	500,000	220,000
寄付金	0		0	0	0	0
遺贈金事務費収入	0		0	0	1,000,000	
廣瀬利雄遺贈金(事務費)	0		0	0	1,000,000	
支 出	18,947,920		18,937,880	18,947,880	16,632,481	13,985,334
管理費	7,750,000	2023年度予算額と同額に加え 会員管理システムの維持費を計上	7,000,000	7,220,000	8,000,287	6,887,882
事業費	11,039,120		11,779,080	11,569,080	8,149,962	6,589,886
会誌編集費	2,300,000	2019・2020年度決算の平均額を計上	2,300,000	2,300,000	4,881,035	3,020,675
ニュースレター発行費	0		0	0	0	0
会員募集費	0		0	0	0	0
会議費	550,000		550,000	550,000	881,241	0
総会費	50,000	2023年度予算額と同額を計上	50,000	50,000	0	0
理事会費	250,000	2023年度予算額と同額を計上	250,000	250,000	713,197	0
幹事会費	250,000	2023年度予算額と同額を計上	250,000	250,000	168,044	0

委員会活動費	1,840,000		3,250,000	3,250,000	632,844	311,419
委員会関係費	1,640,000		3,050,000	3,050,000	632,844	311,419
普及・連携委員会費	1,000,000		1,000,000	1,000,000	522,570	300,000
活動費	300,000	2023年度予算額と同額を計上	300,000	300,000	272,570	0
地域イベント助成費	700,000	2023年度予算額と同額を計上	700,000	700,000	250,000	300,000
国際交流委員会費	100,000		1,600,000	1,600,000	0	0
活動費	100,000	2023年度予算額と同額を計上	100,000	100,000	0	0
国際シンポ経費	0	開催年を参考に計上	1,500,000	1,500,000	0	0
情報サービス委員会費	50,000		50,000	50,000	0	11,419
活動費	30,000	2023年度予算額と同額を計上	30,000	30,000	0	11,419
ホームページ管理費	20,000	2023年度予算額と同額を計上	20,000	20,000	0	0
将来構想委員会費	10,000	2023年度予算額と同額を計上	10,000	10,000	0	0
技術援助委員会費	0		0	0	0	0
活動費	0		0	0	0	0
テキスト刊行委員会費	280,000		280,000	280,000	0	0
活動費	180,000	テキスト勉強会講師派遣旅費(3回分)	180,000	180,000	0	0
テキスト刊行費	100,000	テキスト刊行に係る旅費・謝金	100,000	100,000	0	0
企画運営委員会費	100,000	連続セミナー開催(1回分)	10,000	10,000	0	0
災害対応委員会費	100,000		100,000	100,000	110,274	0
活動費	100,000	調査団派遣の検討会旅費等	100,000	100,000	0	0
災害調査費	0		0	0	110,274	0
海外派遣費	200,000	毎年予定額	200,000	200,000	0	0
大会費	2,733,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	2,733,000	2,733,000	171,730	2,078,511
公開シンポジウム	1,000,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,000,000	1,000,000	6,540	687,277
研究発表会	1,000,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,000,000	1,000,000	165,190	1,391,234
エキスカージョン	33,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	33,000	33,000	0	0
大会懇親会費	700,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	700,000	700,000	0	0
地域研究会費用	2,500,000	2018・2019年度決算の平均額を計上	1,800,000	1,800,000	961,612	750,281
HP整備費等(2022～その他費用と分離)	100,000	HP更新検討	600,000	100,000	0	429,000
その他費用	1,016,120	Zoomライセンス、その他	546,080	836,080	621,500	
英文誌関連費	158,800		158,800	158,800	471,200	475,600
LEE購読料支払い	8,800	冊子希望者2冊分を計上	8,800	8,800	471,200	325,600
ICLEE事務局維持費	150,000	毎年必要額	150,000	150,000	0	150,000
その他の支出	0		0	0	11,032	31,966
前払費用	0		0	0	0	0
源泉所得税預り金	0		0	0	0	0
返金等	0		0	0	11,032	31,966
当期収支差額	0		0	0	△ 2,291,417	4,421,172

引き続き、下記事項について報告があった。
報告事項の概要と主な意見を下記に記載する。

・2022 年度（令和 4 年度）事業報告

事業報告のうち、4) 委員会報告 災害対応委員会に関し、災害調査団の派遣について次の意見が出された。

【主な意見】

- ・災害調査団派遣が地整からの要請がなければ動かないということは変えていただきたいと思う。
- ・委員会決議は学会決議では無いと区別できるようにして公開すべきである。そのようにしないと委員会の独自性が失われることになる。
- ・学会として現地にどのような手続きで入るか、指定区間、直轄に限らず窓口となる整備局とやり取りするしかない。災害対応している現地に無許可で入ることはできない。
- ・学会の名前で提案した場合は学会全体として責任を持つべきだし、グループで提案したならばそのグループはある種の責任を持つべきである。災害調査は機動性も大事だし、学会として科学的な面での責任をどうとるか、バランスをとりながら進めるべきと考える。
- ・提言したことの効果がどうだったかについて後追いをした方が良い。

・第 14 期幹事選出報告

8 月 31 日開催の第 125 回理事会(Web 会議)において、学会規約第 13 条第 1 項により、下記の方々が第 14 期幹事に選出されたので報告する。

〔第 14 期幹事:15 名〕

石田 裕子(再任)	摂南大学理工学部都市環境工学科 教授
笠原 里恵(再任)	信州大学理学部 助教
高橋 陽一(再任)	一般財団法人日本建設情報総合センター BIM/CIM 普及・推進室長
中村 圭吾(再任)	公益財団法人リバーフロント研究所 主席研究員
中村 伸也(再任)	一般財団法人水源地環境センター 技術参与兼研究第二部長
樋村 正雄(再任)	いであ株式会社東北支店自然環境保全部 グループ長
布野 隆之(再任)	兵庫県立大学大学院地域資源マネジメント研究科 准教授
舩田 直樹(再任)	国土交通省水管理・国土保全局河川環境課 技術調整官
丸谷 成 (再任)	応用地質株式会社地球環境事業部自然環境部 グループリーダー
皆川 明子(再任)	滋賀県立大学環境科学部生物資源管理学科 准教授
梅田 信 (新任)	日本大学工学部土木工学科 教授
尾花 まき子(新任)	中部大学工学部都市建設工学科 准教授
加藤 靖広(新任)	日本工営株式会社環境部 次長
千葉 武生(新任)	株式会社建設技術研究所 東京本社 環境部 部長
三宅 洋 (新任)	愛媛大学大学院理工学研究科 教授

(再任・新任の順、五十音順、敬称略)

・廣瀬賞等の創設について

故廣瀬利雄元会長からのご遺贈金の使途として、以下の細則に示す賞および助成を令和 6 年度から創設する。

- ・応用生態工学会 廣瀬賞、研究奨励賞および応用生態工学実践賞に関する細則
- ・応用生態工学会 廣瀬ワークショップ助成に関する細則

・2024 年全国大会（開催案）

2024 年 9 月に埼玉県で実施予定である。

大会実行委員長 埼玉大学大学院 田中規夫教授

全ての審議事項、報告事項が可決、承認され総会は終了した。

最後に第 14 期会長として承認された占部会長から次の挨拶があった。

第 14 期 占部会長挨拶

いろいろなご意見を頂き内容の濃い総会となったと思う。私が 2 期続けて会長になることを推薦される段階でいろいろと考えた。廣瀬氏の遺贈金を受けるときのご遺族のお話、お墓をお参りして考えたこと、OB の方・現役の方からお話を伺い、またワーキンググループの方からもいろんな意見が出た。そのような意見を聞きながら、学会を法人化するしかないと考えた。天野幹事長には素晴らしい定款案を作って頂いた。不備な点があるとの意見はいただいたが、今までの学会の規約等を具備した素晴らしい定款だと考えている。このような経緯もあり推薦された時に引き受けることとした。

再任にあたり 3 つのことを考えている。

1 つめは、学会の基盤整備をすること。これからリーダーシップを発揮すべき若い人たちが活動するうえで財政的に困らないようにすること。

2 つめは、地域の活動を活性化させたい。地区単位を行政単位、地整単位のようにして上手く連携がとれるようにしてはどうかと考える。この地域活動のなかで災害対応についても対処できるのではないかと考えている。第 14 期の役員の皆さんと考えていきたい。

3 つめは、若い人が活躍できる学会にしていきたい。個人的には 65 歳を超えた人は学会運営の中心から退くこともありかと個人的には思っている。できれば 50 代、廣瀬賞をとられた方がリーダーシップを発揮して思う存分学会を盛り上げていただくような学会、体制にしたいと考えている。

そのための先駆けとして、新規の委員会の立ち上げを考えている。竹門氏にお願いしているが、キャリア支援委員会である。この学会に入って良かったなと思えるような社会的な地位向上とか、活動そのものが社会的に認められるとか、ジェンダーで困ったことがあったら自身の所属する組織で問題解決するための場を作るとか、について支援することを予定している。当面ワーキングとして活動し認められれば次年度には委員会として活動することとしたい。

以上 3 点を目標に活動していきたい。皆様からのご意見を頂くとともに応援をお願いします。

～ 以 上 ～

3 応用生態工学会 第 26 回京都大会 (宇治キャンパス) 報告

応用生態工学会 普及・連携委員 (大阪)

山田 啓介 八千代エンジニアリング株式会社

今年の応用生態工学会第 26 回大会は、9 月 20 日 (水) ~ 23 日 (土) に京都大学 宇治キャンパスにて開催されました。新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが令和 5 年 5 月 8 日から 5 類へと変わり、世の中がポストコロナへと移行していくなかで、本大会の研究発表や自由集会はビフォーコロナ同様に対面での開催となり、大変賑わいのある会となりました。

1. あいさつ (大会実行委員長 角 哲也)

長く続いたコロナ禍のトンネルを抜け、ようやく対面での活気ある活動が戻ってきました。この流れに乗って、今年の第 26 回大会は京都大学宇治キャンパスで開催させていただきました。研究発表には口頭発表 54 件、ポスター発表 78 件、自由集会 7 件、また、企業展示 6 件、さらに国際シンポジウムとの合同開催による公開シンポジウムを開催しました。初日、2 日目で総計 378 名、最終日の公開シンポジウムには 545 名の方々にご参加いただきました。公開シンポジウムには、河川財団からアウトリーチ活動へのご支援もいただき、学生、淀川沿川の地元関係者や全国からの漁業関係者などにも数多くご参加いただきました。

今年の公開シンポジウムは、「森里海をつなぐ「砂の道」 ~ 総合的な流域管理に向けて ~」をテーマとして開催させていただきました。流域管理の中でも最近着目されつつも同時に語られることの少なかった総合土砂管理と流域治水に注目して、国内外の専門家をお招きして、最新の事情や方法論などを皆さんと共有できたと思います。

まとめでは、①Flow Regime (流れの変動) + Sediment Regime (流砂の変動) + Wood Regime (流木の変動) の連関、②河川地形、特に、縦断連続性と横断連続性 (接続性) の重要性を認識した上で、③土砂管理は「連立不等式」(治水、利水、環境、経済、社会など) を解く問題であり、各観点から許容できる範囲を提示し、その中で共通解、目的関数の最適化を目指すことであり、④河道の掃流力 (流量) と流砂量のバランスを保ちながら、最後は、⑤河川の維持流量のように、維持土砂量 (流砂量) は決められるか? ⑥さまざまな関係者に、その必要性をどのように説明すればいいか? などの問いかけを行わせていただきました。

翌日のエクスカーションでは、公開シンポジウムを受けて、淀川の「砂の道」を、①流砂環境再生に対する河道側の待受け工法としての木津川でのユニークな中聖牛群の取り組みから、下流部の淀川大堰の閘門建設や淀川河口の干潟再生サイトをツアー参加者 44 名で巡りました。昼食には、淀川の恵みである鰻やボラ、シラスなどを味わう (淀川弁当) を堪能させていただきました。最後に訪れた河口干潟のウインドサーファーの皆さんと土砂管理でつながっているのを実感できたのも大きな収穫です。

本大会は、以下に詳細をご報告しますように、大きなトラブルもなく大盛況のうちに終わることができました。これもひとえに実行委員会の皆様、学会本部の関係者および参加者の皆様のご支援の賜物です。今回久しぶりに開催した懇親会では、全国からの美味しいお酒とおつまみに舌鼓を打ち、忘れかけていた応用生態工学会の醍醐味を、若い世代とともに楽しむことができました。

ポストコロナの応用生態工学会の新たなスタートとして、本大会における、皆様の活発な議論、意見交換、そして全国各地からお集まりいただいた参加者皆様の交流の成果を次に繋いでいただくことを期待して、ご報告と御礼の言葉と致します。

2. 大会概要

第 26 回京都大会の概要は以下の通りです。

(1) 会場

京都大学 宇治キャンパス (京都府宇治市五ヶ庄)



きはだホール (メイン会場) 入り口



受付付近の風景

(2) 大会日程

2023 年 9 月 20 日(水)~23 日(土)

- ・ 9 月 20 日(水) 研究発表 (ポスター)、自由集会、企業展示
- ・ 9 月 21 日(木) 研究発表 (口頭・ポスター)、自由集会、委員会、企業展示、懇親会
- ・ 9 月 22 日(金) 公開シンポジウム、総会、幹事会・理事会、企業展示、表彰式
- ・ 9 月 23 日(土) エクスカーション

(3) 開催方法

対面 (公開シンポジウムのみ対面+Web)



大会 Web サイト

3. 研究発表

発表件数は、口頭発表が 54 件、ポスター発表が 78 件の合計 132 件でした。今回の発表件数を第 14 回札幌大会から第 24 回札幌大会まで(第 16 回、第 21 回、第 25 回は 3 学合同大会のため対象外)と比較すると、以下のように推移しており、今回大会も例年と概ね同程度の発表件数でした。

大会名	口頭発表件数	ポスター発表件数	合計
第 14 回札幌大会	36	68	104
第 15 回金沢大会	43	50	93
第 17 回大阪大会	45	70	115
第 18 回東京大会	45	73	118
第 19 回郡山大会	47	75	122
第 20 回東京大会	45	75	120
第 22 回東京大会	41	71	112
第 23 回広島大会	42	71	113
WEB 研究発表会	53 (オンライン発表)	(ポスター発表無し)	53
第 24 回札幌大会	109 (オンライン発表)	(ポスター発表無し)	109

(1) 口頭発表

口頭発表は、54 点の応募を頂きました。発表内容は 9 つのセッションによる発表が行われました。各セッションの内訳は、環境 DNA (9 点)、河川管理 (3 点)、DX (5 点)、保全 (6 点)、モニタリング (6 点)、河川環境 (3 点)、生息場所 (4 点)、底生動物 (6 点)、魚類 (6 点)、植物 (6 点) でした。最優秀口頭発表賞は、京都大学の辻冨月さん発表の「宮崎県大淀川水系で猛威を振るうコウライオヤニラミ ～分布の現状と在来魚類に与える影響～」が受賞されました。

今回の発表はいずれも対面開催であり、発表者各自が持ち込んだ PC に HDMI ケーブルを接続してスライドを投影いただく形式で開催しました。大きなトラブルもなく無事に口頭発表を進めることができたのは、発表者皆様の事前の接続確認や座長の的確な進行の賜物と存じます。この場を借りてお礼申し上げます。

報告：山田 啓介 (八千代エンジニアリング株式会社)

(2) ポスター発表

ポスター発表は、総数 78 点の応募を頂きました。発表タイトルやキーワードを踏まえ、口頭発表と同様のカテゴリ分類を行い、ポスター発表については、9つのセッションに分類しました。セッションの内訳は、DX (10 点)、河川管理 (12 点)、環境 DNA (9 点)、魚類 (9 点)、植生 (5 点)、生息場所 (13 点)、底生動物 (9 点)、保全 (9 点)、モニタリング (2 点) としました。

発表当日は、1 日目にハイブリッドスペースにおいて、コアタイムを A (発表番号末尾奇数番号) と B (発表番号末尾偶数番号) に分けて実施頂きましたが、コアタイム以外の時間も含め、多数の来場者が訪れており、質疑応答や活発な意見交換等が行われているのが各所で確認されました。

また、発表者も学生からベテランまで様々でしたが、特に若手のプレゼン能力の高さが光っており、多くの人々が耳を傾けていました。その結果を表すように、最優秀ポスター発表賞は、広島大学大学院生のプレゼンによる「侵略的外来種スクミリンゴガイの摂食活性の温度依存性：温暖化の影響予測【PG-2】」が受賞されたほか、優秀ポスター発表賞として、3 点が受賞されました。

最後に発表者の皆様、来場者の皆様、それから運営スタッフの皆様に、活発なポスター展示を無事に終えられた事に対して、この場をお借りしてお礼を申し上げます。



ポスター会場の様子 (コアタイム A)



ポスター会場の様子 (コアタイム B)

報告：森 博隆 (株式会社オリエンタルコンサルタンツ)

(3) 発表賞

表彰は、審査対象を若手研究者（学部学生、大学院生、ポスドク等の若手会員）及び現場技術者または行政担当者とし、事前に審査対象となることを希望した発表者に限定しました。大会実行委員会および研究発表会表彰運営委員会を中心に優秀発表賞審査委員会を組織し、厳正な審査を経て受賞者を選考しました。ポスター発表では、78 件中 53 件が優秀発表の審査対象となり、10 件を「優秀ポスター発表賞」に選定しました。さらに最も優れたポスター発表を「最優秀ポスター発表賞」に選定しました。



表彰式参加の受賞者

口頭発表では、54 件中 37 件が優秀発表の審査対象となり、9 件を「優秀口頭研究発表賞」に選定しました。さらに最も優れた口頭発表を「最優秀口頭発表賞」として選定しました。

受賞研究発表は以下のとおりです。

報告：武本大輔（国際航業株式会社）

【最優秀ポスター発表賞】「※」は発表者を示す。

PG-2 侵略的外来種スクミリンゴガイの摂食活性の温度依存性：温暖化の影響予測

宮田優大※(広島大学統合生命科学研究科)・中坪孝之(同)

【最優秀口頭発表賞】

OA-2 宮崎県大淀川水系で猛威を振るうコウライオヤニラミ ～分布の現状と在来魚類に与える影響～

辻冨月※(京都大学)・芝田直樹（タカラバイオ株式会社）・渡辺勝敏（京都大学）・土居秀幸(同)

【優秀ポスター発表賞】

PB-5 河道内の樹林化予測モデルの開発と予防保全の考え方に基づく樹木管理への活用方策の検討

小田洋平※(株式会社建設環境研究所)・宮脇成生(同)・荒木隆(同)・葛西直樹(同)・戸田祐嗣(名古屋大学大学院工学研究科)

PB-10 石狩川と旧川湖沼の連続性回復に伴う EcoDRR 効果の推定

安田希亜良※(滋賀県立大学大学院環境科学研究科)・石澤沙耶香(日本エヌ・ユー・エス株式会社)・瀧健太郎(滋賀県立大学大学院環境科学研究科)

PG-6 全国 109 水系を対象とした水生昆虫類の種多様性と流量特性に関する大規模データ解析

岡本聖矢※(土木研究所自然共生研究センター)・森照貴(同)

PG-7 長期データを用いた出水攪乱に対する底生動物群集の応答の把握

大江航志※(愛媛大学大学院理工学研究科)・太田克哉(同)・三宅洋(同)

PH-1 球磨盆地周辺流域における追耕作放棄水田を活用した流出抑制及び湿性生物生息場機能の評価と強化策の検討―相良村瀬戸堤自然生態園を対象に―

新垣俊介※(熊本大学)・一柳英隆(熊本県立大学)・鹿野雄一(九州オープンユニバーシティ)・伊東麗子(熊本大学)・皆川朋子(同)

PC-4 パッシブサンプリングツールを用いた環境 DNA 調査の施行

今村史子(日本工営株式会社)・五十嵐美穂(同)・郡司美佳(同)・前原裕※(同)・都築隆禎(公益財団法人リバーフロント研究所)・内藤太輔(同)・赤松良久(山口大学大学院創成科学研究科)・中尾遼平(同)

PD-7 鴨川に設置した木製井桁箱型魚道の特徴と実績報告

中筋祐司※(京の川の恵みを活かす会／京都市産業観光局)・竹門康弘(京の川の恵みを活かす会／大阪公立大学国際基幹教育機構)

PF-11 土器川汽水域における河道掘削による相対潮汐地盤高の変化と生物への影響検討

清久笑子※(株式会社建設環境研究所)・富松啓太(同)・安藤義範(同)・向山正純(国土交通省四国地方整備局香川河川国道事務所)

PH-4 天塩川下流自然再生事業における振老旧川での渡り鳥生息環境改善の取り組み

紀國聡※(株式会社建設技術研究所)・前田敬(同)・井上創(同)・岡村遥(同)・若松延幸(国土交通省北海道開発局留萌開発建設部)・西田侑希(同)

【優秀口頭発表賞】

OD-3 種子スティック法を使ったタシロラン保全手法の確立

谷浦拓馬※(中央復建コンサルタンツ株式会社)・重吉実和(同)・松井敏彦(同)・佐々木大輝(同)・山内寛(同)・芦野洸介(同)・遊川知久(国立科学博物館 筑波実験植物園)

OD-6 麻機遊水地における湿地創出は水生生物の保全に寄与するか？―あさはた緑地における公園利用の一環としての湿地づくりから―

田和康太※(国立環境研究所気候変動適応センター)・西廣淳(同)

OE-3 鳥類モニタリングのための水面模倣バードバスの開発とその誘引効果

吉田彩乃※(北海道大学大学院農学院)・山田浩之(北海道大学大学院農学研究院)・北野雅人(竹中工務店技術研究所)・佐野祐士(同)・宮田弘樹(同)・三輪隆(同)

OF-1 河川水温モデルを用いた気候変動が流域スケールの水温に及ぼす影響に関する検討

福丸大智※(山口大学大学院創成科学研究科)・赤松良久(同)・入江政安(大阪大学大学院工学研究科)

OG-2 過去の景観構造がエゾサンショウウオの分布に与える影響 – 複数の生態学的指標に着目して –

玉田祐介※(株式会社長大／帯広畜産大学)・雫田享佐(株式会社長大)・大内のぞみ(同)

OI-2 淀川大堰下流の塩分分布とアユの遡上数の関係～アユは塩分が低い水塊を「道標」に遡上する？～

瀬口雄一※(株式会社建設技術研究所大阪本社)・森井裕(同)・佐藤大生(同)・竹門康弘(大阪公立大学国際基幹教育機構)

OJ-1 千曲川における連続 8 年の植生変化と流況・地形の関係

宮脇成生※(株式会社建設環境研究所)・木下長則(同)・鈴木研二(日本スペースイメージング株式会社)・鈴置由紀洋(同)・池内幸司(一般財団法人河川情報センター)

OI-4 「バーブ工」によるサケの産卵環境づくり～北海道標津町における漁業関係者の「小さな自然再生」の取り組み～

渡辺恵三※(株式会社北海道技術コンサルタント)・岩瀬晴夫(同)・平井敏雄(標津漁業協同組合)・織田美登志(同)・平澤勝秋(根室管内さけ・ます増殖事業協会)・大畑真吾(標津町水産課)・増田慎司(同)・仁科斎(標津サーモン科学館)・市村政樹(同)

4. 自由集会

本大会では、さまざまなテーマで 7 件の自由集会が開催されました。素晴らしい集会を企画、運営していただいた方々に御礼申し上げます。また、平均約 80 名、最大で約 130 名と、多くの方に参加いただきました。会場の都合で立ち見の方が出たこと、時間の重複で希望の集会に参加できなかった方も多数居られたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

いずれの会場でも、熱心な発表に続いて活発な意見交換が交わされており、今回の自由集会のテーマへの関心の高さがうかがわれました。どのテーマも、今後継続・発展していく内容であり、次年度以降の学会や自由集会でも引き続き活発な議論が行われることを期待しています。担当委員という役回り上、それぞれの集会に腰を据えて参加することができなかったのが悔やまれます。

(各自由集会の内容は、プログラムに掲載した企画者様からの文章をそのまま記載しております。ご了承ください。)

報告：加瀬 瑛斗 (パシフィックコンサルタンツ株式会社)

(1) 自由集会A：「河川・ダムに関するデータベースについての意見交換会」

日時：9 月 20 日 (水) 9:30~11:30 (きはだホール)

企画者：中村太士 (北海道大学)、一柳英隆 (水源地環境センター)

内容：日本の河川・ダムでは、国土交通省やその他管理者が、流量や水位、水温・水質、生息する生物相 (河川水辺の国勢調査) など多くのデータを継続的に取得している。これらのデータを集約して整理することで、個人の取得のみでは成し得ない広域・長期の解析が可能になる。しかし、これらのデータは、河川・ダム管理者が使用する前提で管理されており、広域・長期で利用しようとする研究者にとっては必ずしも利用しやすい形にはなっていない。この意見交換会は、研究者側と河川・ダム管理者との意見交換を行い、両者にとって良い形を探ろうとするものである。研究者とデータを管理している行政とが意見交換ができる場があることが重要であり、大きな義務をもたずに、一歩ずつ前進させたい。



(2) 自由集会B：「生態水理研究会－Ecohydraulicsやろうぜ！」

日時：9月20日（水） 9:30～11:30 （連携研究棟）

企画者：福田信二（東京農工大学）、青木宗之（東洋大学）、伊豫岡宏樹（福岡大学）、椿涼太（名古屋大学）、原田守啓（岐阜大学）

内容：生態水理学（Ecohydraulics）は、河川・湖沼・沿岸域まで「水」によって形成される生息場所の物理環境、その動的なプロセス・メカニズムと生態的機能の解明を主題としながら、ミクロな現象から広域・長期間の現象まで、対象領域も研究手法も拡がりつつある分野です。国際的な研究コミュニティとしては ISE（International Symposium on Ecohydraulics）が隔年で開催されており、2018 年に開催した日本大会には国内外の研究者・実務者が多数参加しました。次回の ISE2024 はカナダのケベックで開催される予定です。本集会では、日本の生態水理研究を盛り上げるべく、国際的な Ecohydraulics コミュニティの研究テーマのトレンドもレビューしながら、主に河川をフィールドとしている中堅メンバーによる話題提供と、先達からの基調講演を踏まえ、日本発の生態水理について意見交換したいと思います。



(3) 自由集会C：「日本の河川水温研究について語ろう！」

日時：9月20日（水） 14:30～17:00 （きはだホール）

企画者：原田守啓（岐阜大学）、赤松良久（山口大学）、一柳英隆（熊本県立大学）

内容：河川水温は、河川環境の重要な構成要素であり、水生生物の分布や季節動態を支配し、各地域の河川生態系を特徴づけている。また、近年の温暖化により、陸水の水温上昇が世界各地で報告されており、温暖化が生態系に与える大きな影響要因の一つとされている。しかしながら、降水量が多く流量変動が激しい日本の河川における水温研究は未だ発展途上にある。本自由集会は、“水温”を対象とした研究グループ・研究者が日本各地で行っている研究活動について概観する。それぞれの研究者がどのようなモチベーションで水温を研究対象とし、どのような手法を選択し、どのような研究アウトプットを得たのかについて話題提供する。さらに、会場との意見交換を通じ、日本の河川水温研究の今後の方向性と可能性についてディスカッションする。「川の水温って面白い！」



- (4) 自由集会D：「田んぼのいきものをどうやって守っていくか? —水田水域における多様な生物の保全と再生— その⑦～日本の水田水域・湿地環境の未来～」

日時：9月20日（水） 15:00～17:00 （連携研究棟）

企画者：田和康太（国立環境研究所）、佐川志朗（兵庫県立大学）、河口洋一（徳島大学）

内容：近年の生物多様性の保全を取り巻く国際的な潮流として、30 by 30 が挙げられる。この目標を達成するためには、既存の自然保護区に加え、これら以外の生物多様性保全に貢献する場所を OECM（自然共生サイト）として順次認定することが求められる。また、この目標を目指すことは、NbS（自然に根ざした社会課題の解決策）に資する健全な生態系保全のための基盤的・統合的な取り組みとなりうる。水田水域は人々が稲作のために作り出した生業の場であるものの、

湿地性の生物群を中心とした生物多様性保全の場としての側面もあり、OECM との親和性も高い。また、水田水域はその洪水緩和機能や水質浄化機能などから NbS の有力な一手にも数えられる。しかしながら、水田水域は担い手の不足や宅地化等によって急速に消失している現状がある。また、水田耕作では今後、常に気候変動の影響を受け続けることが予測されている。これらの問題を解決するためには、地域住民、農家（地権者）、企業、自治体、研究者が有機的に機能し、耕作放棄田や休耕田を含む様々な水田水域において OECM 認定や生物多様性の保全と気候変動適応を両立する NbS の提示が求められる。本集会では本件に関して先進的な取り組みを進めるパタゴニアに RO（リジェネラティブ・オーガニック：農業を持続可能の範疇に留めるだけでなく、よりポジティブに環境再生にも貢献できるように営む農業）の理念やそれに基づいて水田システムを探究する取り組みを紹介いただき、つづいて複数の水田地域における OECM 化を含めた生物多様性保全の評価や取り組みについて話題提供いただく。そこから、日本の水田水域、そして湿地環境の未来について考える場としたい。



- (5) 自由集会E：「平成29年7月九州北部豪雨被災河川を事例として、

河川災害復旧の在り方を考える」

日時：9月21日（木） 15:00～17:30 （きはだホール）

企画者：鬼倉徳雄(九州大学)、皆川朋子（熊本大学）

内容：平成29年九州北部豪雨では、山地斜面崩壊、谷の浸食、谷底平野への堆積、流木の流下などにより甚大な被害が生じ、特に地形変化が大きかった中小河川では、河川生物に大きな影響が及んだ。応用生態工学会では、災害発生後、直ちに災害調査団を結成し、災害による生態系への影響調査およびその後の復旧に対する提言を行った。災害後、災害調査団のメンバーを中心とする河川生態学術研究会筑後川研究グループが発足し、災害後の生態系の変化等について研究が継続されることとなった。多くの中小河川で復旧事業が実施され、河道拡幅や河床掘削が行われ、豪雨災害を上回る影響が魚類等に生じる可能性があることが懸念される。九州北部豪雨から6年が経過した。本自由集会では、魚類の保全目標、具体的な復旧工事の方法、復旧工事による魚類への影響、環境に関連する災害復旧の制度などについて情報を共有し、今後のより良い災害普及のあり方について議論する。



- (6) 自由集会F：「ローカルなグリーンインフラの始め方」

日時：9月21日（木） 16:00～17:30 （連携研究棟）

企画者：小笠原奨悟（パシフィックコンサルタンツ株式会社）、西田貴明（京都産業大学）

内容：グリーンインフラは自然環境が有する多様な機能を活用しようとする考え方であり、2023年夏頃には新たな「グリーンインフラ推進戦略」（国土交通省）の公表が予定されているなど、社会課題・地域課題を解決する手段として、ますます注目が高まっている。総合地球環境学研究所では、2018年度から2022年度にかけて、グリーンインフラの地域実装を目指して「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装」（地球研 Eco-DRR プロジェクト）を実施してきた。本集会では、地球研 Eco-DRR プロジェクトが取り組んできた研究や実践の成果をグリーンインフラの地域実装の視点でとりまとめた「ローカルなグリーンインフラの始め方」（令和5年3月）を題材に、今後のさらなるグリーンインフラの地域実装に向けた議論を行いたい。



(7) 自由集会G：「氾濫原でのEcoDRRをいかに進めるか

ー滋賀県の氾濫原を対象としたEcoDRR研究ー

日時：9月21日（木） 14:30～16:00 （セミナー室4+5）

企画者：瀧健太郎（滋賀県立大学／総合地球環境学研究所）、吉田丈人（東京大学／総合地球環境学研究所）

内容：総合地球環境学研究所 EcoDRR プロジェクト（代表：吉田丈人、正式名称「人口減少時代における気候変動適応としての生態系を活用した防災減災（Eco-DRR）の評価と社会実装」、RIHN14200103、実施期間：2017-2022）では、滋賀・千葉・福井での実践研究とともに、これらの成果を踏まえたリスクと恵みの全国評価を行った。本自由集会では、滋賀サイト、特に河川管理・氾濫原管理・土地利用に関わる実践研究について、6年間の成果を振り返り（共有し）、今後のわが

国での氾濫原管理のあり方、学術研究が果たすべき役割について議論を行う。滋賀県では、全国に先駆け「地先の安全度」マップ（内外水を同時に考慮した多段階浸水想定・水害リスクマップ）を整備し、流域治水を本格展開している。このようなリスク評価は、各種生態系サービスの評価にも応用でき、また、リスクと恵みを考慮した土地利用の検討を可能にしており、さまざまなEcoDRR/グリーンインフラに関する研究が展開された。EcoDRR プロジェクトのうち、主に滋賀サイトで上記課題に取り組んだ研究者からの個別発表と、発表者を中心とした総合ディスカッションを行う。



5. 公開シンポジウム

本大会応用生態工学会第 26 回京都大会公開シンポジウム『森川里海をつなぐ「砂の道」～総合的な流域管理に向けて～』は、応用生態工学会第 26 回京都大会実行委員会と応用生態工学会国際交流委員会が共同で主催し、2023 年 9 月 22 日（金）に京都大学きだホールを主会場とし、オンライン配信も行いながら、同時通訳を入れて開催しました。

現代の河川管理では、環境保全の視点を取り入れつつ持続可能な社会システムを構築する管理が求められており、従来の流域管理のなかで生じた土砂管理上の問題、社会のあり方の変化に伴う土地利用や水需要の変動、気候変動に伴う水害の激甚化といった新たな問題にも取り組む必要があります。これらの問題は河川の一部のみで対応できるものではなく、流域全体に視野を広げ、全体を巧みに利活用して対策を講じて行く必要があります。

この様な背景をもとに、本シンポジウムでは流域土砂管理、流域治水、生態系の保全に精通する国内外の専門家を招き、これまでの事例の紹介や考え方、問題点などを多くの参加者の皆様と共有し、多くの問題に対応した総合的な流域管理を考えることを目的として開催されました。

初めに、山梨大学の八重樫咲子准教授（応用生態工学会国際交流委員会委員長）から上記の趣旨説明が行われ、続いて 6 名の国内外の専門家に講演をしていただきました。

最初の講演者はカリフォルニア大学バークレー校（アメリカ）のマット・コンドルフ教授で、講演題目は「洪水流下と河川の連続性確保のための河道拡幅と氾濫原の再接続」でした。アメリカやドイツで実施された洪水流の流下を目的としたバイパス流路における氾濫原の再生事例、河道拡幅事業と合わせて実施した置土事例、河道からの堆積土砂の浚渫およびそれに伴う河道形状の変遷などを紹介し、治水目的の事業が治水のみならず、生物の生息場の創生や、利水上の価値も高める効果もあった点を説明されました。



シンポジウムの様子

二人目の講演者はコロラド州立大学（アメリカ）のエレン・ウォール教授で、「河川における土砂の接続性」という講演題目でお話いただきました。人為的攪乱のない自然な状態の河川では水・土砂・流木の存在量は時空間的に変動しており、自然な環境における河道の生態系サービスを環境改変された河川でも有効利用するためには、自然な河川の河道の連続性や土砂の連続性を知る必要があります。これらを知るために必要となる流量、土砂量、流木といった 3 つのレジームの考え方について説明されました。



コンドルフ教授の講演

三人目の講演者はボン大学（ドイツ）のマリエル・エバース教授で、「水文気候変動と形態学的時空間ダイナミクス」という題目で、オンラインでお話いただきました。モンスーンエリアのマンマーの沖積地における農業の事例を元に、乾季と雨季を繰り返し時空間的に大きく変動するエリアの土地利用のリスクと利点、このような環境でのユニークで適応的な農業が紹介されました。その上で、気候変動下で変化する気候および水文条件、非常に激動的な水文形態学的条件と洪水リスクに対応していく必要性が説明されました。

四人目の講演者は大阪公立大学の竹門康弘先生で「流砂系総合土砂管理による生息場改善の展望」についてお話いただきました。講演では、氾濫原におけるたまりなど生息場の遷移、ダム下流域における砂の動く川づくり、動的な流砂環境による水生生物への効果、置き土を使った干潟造成について、河川事業者のみならず一般市民の皆様と共に実施した事例を紹介されました。

五人目の講演者は一般財団法人電力中央研究所の中野大助上席研究員で、「耳川水系総合土砂管理と生態系復元～持続可能な流域管理を目指して～」という題目でした。耳川流域の通砂事業による下流域の生息場構造の変化、底生動物の種多様性の上昇と群集構造の変動、海域への土砂供給に伴う甲殻類多様性への効果について紹介し、通砂による効果とともに多様なステークホルダーとの危機感の共有の重要性について説明されました。

六人目の講演者は滋賀県立大学の瀧健太郎教授で、講演題目は「流域治水の展望と課題」でした。これまでに滋賀県で携わってきた流域治水の事例を元に、滋賀県の水害の特徴とそのリスク、多段階式の洪水被害リスクマップの作成、グリーンインフラや伝統的な治水設備を利用した洪水対策について、多くの関係者を巻き込み流域治水を実施していく必要性について説明されました。

最後の総合討論ではコーディネーターの京都大学防災研究所の角哲也教授のもと、6名の講演者が登壇し、シンポジウムテーマに関するこれまでの研究の進展の説明があり、講演のキーワードとして多様なレジーム（土砂、流れ等）、河床地形（堆積土砂の形態や動態）、河川の連続性・接続性（縦断、横断）、流量と流砂のバランス、多様な関係者・ステークホルダーへの説明などが挙げられました。その後は参加者からの質問に答える形で実施しました。主な議論としてはまず、総合土砂管理や流域治水を行う上で多様な関係者に働きかける方法について討論を行い、これまでに実施された事例から多様な恩恵があった事実や数値モデルから推定される効果をシナリオや背景を含めて伝えること、ステークホルダーをつなげるキーパーソンの存在が重要であるといった意見が出ました。



ウォール教授の講演



エバース教授の講演



竹門先生の講演



中野上席研究員の講演

次に、海外における海を含めた流域管理の考え方についての質問があり、海外の講演者から海岸侵食や栄養塩の管理について日本同様の問題があることが共有され、国内講演者からは応用生態工学会でも沿岸・海洋の技術者や研究者を巻き込んだ議論を行う必要があるという意見が出ました。最後に講演者の皆様にどのような川を目指すかとよい意見を行い、短期的視点のみならず中長期視点で河川管理を捉え、持続可能な考え方をする必要があるという意見が出されました。そのためには耳川の事例のようにさまざまな事象を継続的に調査および定量化して評価し、それぞれの地域に適合した手法を検討する必要があるとまとめられました。

今回の公開シンポジウムでは『森川里海をつなぐ「砂の道」～総合的な流域管理に向けて～』というテーマのもと、国内外の事例を共有し、今後の応用生態工学会の役割についても言及が行われました。本シンポジウムの参加者は会場参加者 164 名、オンライン参加者 381 名、合計 550 名もの方にご参加いただきました。シンポジウム後のアンケートでは多くの皆様が内容に満足されており、本シンポジウムの内容について今後も発信してほしいという声もあり、多くの方々にとって意義のあるシンポジウムとなったことが伺えました。ご登壇いただいた皆様、運営にご協力いただいた皆様、そして参加していただいた多くの皆様のおかげで本シンポジウムを無事実施することができました。この場をお借りしまして厚く御礼申し上げます。



瀧教授の講演



総合討論の様子

報告：八重樫咲子（国際交流委員会委員長／山梨大学）、角哲也（大会実行委員長／京都大学）

6. 企業展示

企業展示は、応用生態工学会賛助会員 5 社、非賛助会員 1 社を含む計 6 社にご参加いただきました。展示としては、環境 DNA 解析の新サービス、モバイル環境 DNA 調査・解析キット、外来種駆除や未規制物質インパクト把握・対策提案、OECM 登録サポート等、スマートフォンを用いたデジタル野帳システム、ゲームエンジンを用いた景観作成 VR、リモートセンシング技術を用いた植生図作成、高密度点群データを用いた河床凹凸の指標化、内水浸水簡易モデルによる浸水低減効果の概況予測、圧力式水位計を活用した河床高変化観測手法、長期撮影対応の水中カメラ、ドローンラジオテレメトリー、生物標識など、各企業の技術サービスや製品を紹介していただきました。また、一般社団法人水源地環境センターからは、会場となった京都大学の京都大学学術出版会が発刊されている「ダムと環境の科学シリーズ」の最新刊『IV 流砂環境再生』を含む全シリーズの展示・販売をしていただきました。

報告：池田欣子（アジア航測株式会社）



株式会社生物技研



応用地質株式会社



株式会社建設環境研究所



株式会社建設技術研究所



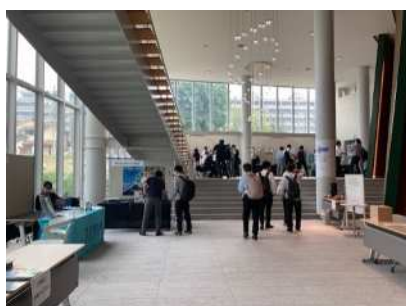
一般社団法人水源地環境センター



株式会社田中三次郎商店



会場の様子



会場の様子

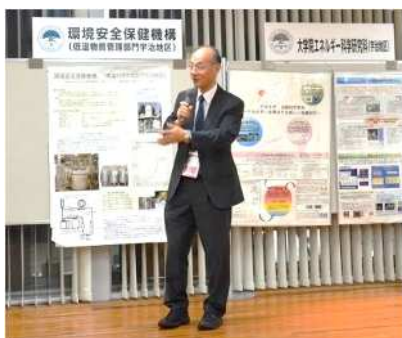
7. 懇親会

懇親会は、大会会場である京都大学宇治キャンパスの宇治おうばくプラザ内ハイブリッドスペースにて開催しました。全国大会での懇親会は令和元年の広島大会以来 4 年ぶりであり、今回は 154 名（一般 132 名、学生 22 名）にご参加を頂き、大盛況の懇親会となりました。

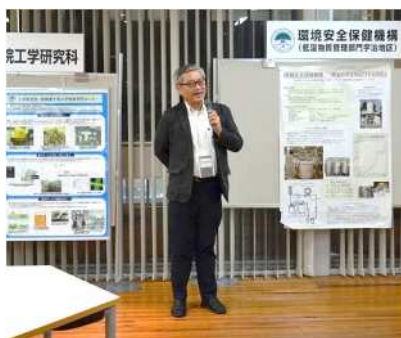
はじめに石田実行委員による開会の辞、角実行委員長の主催者挨拶のあと、今大会の来賓として国土交通省近畿地方整備局の常山河川部長にご挨拶いただき、占部先生の乾杯で幕を開けました。会の途中では公開シンポジウム招待講演者のカリフォルニア大学の Matt Kondolf 教授にご挨拶いただくとともに、各地域研究会から持ち寄られた地域のお酒や名産品を皆さまにご堪能いただきました。また、来年の全国大会は埼玉大学での開催となり、大会実行委員長の田中先生よりいただいたメッセージをご紹介します。最後に実行委員一同を代表して土居実行委員より挨拶させていただきました。

いつもながら、遠方でお会いする機会の少ない皆様とお酒を飲みながらの歓談に、2 時間では足りないほどの大変盛り上がった懇親会となりました。参加頂きまし皆さまに改めて御礼申し上げます。また、地域研究会からのお酒や名産品をご持参いただいた普及・連携委員の皆さま、ありがとうございました。

報告：杉山 智治（日本工営株式会社）



角大会実行委員長



近畿地方整備局 常山河川部長



応用生態工学会 占部会長



Matt Kondolf 教授



土居実行委員



持ち込まれたお土産

8. エクスカーション

エクスカーションの舞台となった淀川は関西を代表する一級河川であり、京都・大阪の大都市圏を含む三重・滋賀・兵庫・奈良の 2 府 4 県にまたがる広大な流域を誇ります。前日に開催された公開シンポジウム『森里海をつなぐ「砂の道」～総合的な流域管理に向けて～』と連動して、この流域の山林や農地から供給される土砂が大阪湾に運ばれる「砂の道」をたどることで「砂の道」の意義を感じるとともに、「砂の道」の恩恵をうける淀川河口を代表する「幸^{きち}」である淀川産鰻等を食材とする『淀川弁当』を味わうことで、「砂の道」の恩恵を体感頂く企画でした。当日は、前日の国際シンポジウムでご講演を頂いたカルフォルニア大学のコンドルフ先生、コロラド州立大学のウォール先生とその学生さんにもご参加頂き、貸し切りバスがほぼ満席となる 44 名の参加がありました。

エクスカーションの開催・実行にご助力いただきました国土交通省淀川河川事務所木津川出張所・毛馬出張所・福島出張所の皆様、さらには現地での説明を頂いたやましろ里山の会の皆様、エクスカーションの目玉となる「淀川弁当」を運んで頂いた大阪市漁業協同組合の畑中様ほか、多くの皆様に深く感謝申し上げます。

(1) エクスカーションの概要

1) 行程

令和 5 年 9 月 23 日 (土) 9:00~16:30

J R 京都駅⇒木津川・中聖牛群⇒淀川大堰⇒淀川河口⇒J R 大阪駅

2) 担当

大阪公立大学

竹門康弘 (生息場生態学)

3) 各見学地での状況

①木津川・中聖牛群

木津川は上流のダムにより土砂供給が減少したことで、河道の二極化が生じています。河道の二極化は河道内樹林地の増長だけでなく、流水域に付随するワンド・たまりといった一時的水域の減少ももたらし、河川生態系の多様性を低下等も課題となっています。そこで、京都大学防災研究所と国土交通省淀川河川事務所、さらには地元の N P O ・やましろ里山の会がタッグを組んで平成 29 (2017) 年から、河道内に伝統河川工法である中聖牛を設置し、かつての網状流路を再生する試みが進められています。中聖牛により出水時に流れが変わることで、局所的に土砂が堆積したり、侵食したりして河床地形が変わり、時間の経過とともに中聖牛が朽ち、やがて河川の一部になります。現地では、企画者である竹門先生による中聖牛とその周辺に分布するたまりの成り立ち、土砂の挙動、そして朽ちていく中聖牛についてご説明がありました。また、事前に京都大学防災研究所の小林先生と学生さんらによって、中聖牛のまわり点在するたまりに生息する魚類や水生昆虫が採集されており、それらも参加者の興味を引きました。さらに、中聖牛設置の立役者であるやましろ里山の会のメンバーから、中聖牛設置の苦労話や河川環境の保全に掛ける熱い気持ちを伺い、河川環境の保全に携わる者として、改めて実地での取り組みの大切さを学んだ思いがしました。



説明をする竹門先生



説明を聞く参加者



中聖牛の周囲に発達したたまり



流木等が引っ掛かり朽ちていく中聖牛



参加者の注目を集める生物



やましろ里山の会のメンバーの説明

②淀川弁当

木津川・中聖牛群から淀川大堰へ移動のバスの途上では、今回のエクスカーションの目玉である『淀川弁当』に舌鼓を打ちました。お弁当の製作はミシュラン一つ星の料亭「雲鶴」で、淀川鰻・淀川しじみ・ボラ味噌煮・黄ビレ柚庵焼き等の淀川の食材がふんだんに使われていました。「どれが一番美味しかった？」という即席アンケートでは、なんと鰻を抑えてボラ味噌煮が一番となる等、思い出深い味となりました。



かなり美味しかった『淀川弁当』

③淀川大堰

新淀川の河口から 9km にある淀川大堰の上流約 10km は堰の湛水域となり、上流から運ばれてきた土砂の堆積が卓越することから、新淀川河口への「砂の道」が完成されていません。現在、淀川大堰は堰の上流側と下流側を船で往来するための施設である淀川大堰閘門が建設中です。この淀川大堰閘門によって、堰の上流側で堆積する土砂は新淀川の河口へ運ばれ、「砂の道」が再生される可能性があります。現地では、巨大な施設である淀川大堰と淀川大堰閘門の建設地を見学するとともに、付随する施設である毛馬水門におけるアユの遡上促進の取り組みの説明がありました。



説明を聞く参加者



建設が進む淀川大堰閘門

④淀川河口

淀川の「砂の道」の終着点です。今年 1 月にマッコウクジラの淀ちゃんが漂着したことで一躍全国区の注目が集められましたが、この場所では 2019 年より建設発生土砂を用いた干潟造成が試行されています。この干潟が出来たことで、ウインドサーフィンを楽しむ人々が集まってきて、賑わいを見せています。現地では、風浪による砂の移動を見学するとともに、生息する魚類等の説明があったほか、ウインドサーフィンを楽しむ人との交流もありました。



説明を聞く参加者



淀川河口を背景にした参加者の集合写真

(2) 終わりに

ほぼ終日の長いプログラムであったにも関わらず、「砂の道」を完全にたどることができず、ポイント的な訪問になってしまいました。しかし、『淀川弁当』だけでなく地域の人々との交流もあり、淀川という川のポテンシャルを感じて頂けたエクスカージョンになったと感じます。ご参加ありがとうございました。

報告：瀬口雄一（株式会社建設技術研究）

9. 大会を終えて

ウィズコロナによる習慣が浸透していく中で、近年多くのシンポジウムや学会の大会が、Web 開催または Web 併用にてその活動を実施してきました。しかし、今回の京都大会は、ポストコロナを見据えて研究発表や自由集会对面のみの開催としました。また、令和元年度の広島大会以来 4 年ぶりとなる懇親会も開催しました。

法律上の位置付けが変わったとはいえ、感染症が完全におさまったわけではない中で、いったいどれくらいの方々に越えただけなのか、来て下さる方々に有意義な時間を過ごしてただけなのか、そもそも関西地区では実に 10 年ぶりとなる大会開催に万全の準備のもと臨むことができるのか、など、大会準備期間中は不安が尽きませんでした。しかし、蓋を開けてみれば、現地参加人数や発表件数は少なくとも過去 10 年の大会 (3 学会合同を除く) で最も多く、懇親会参加者数も広島大会と同程度の規模となり、大会は大盛況のうちに幕を下ろしました。

今回大会が大きなトラブルもなく大変盛り上がりのある会になったのは、ご参加下さった方々に日ごろの素晴らしい研究・業務成果を発表していただいたおかげであることは勿論のこと、大会の陣頭指揮を執って下さった角実行委員長・竹門副実行委員長、業務や研究活動と並行しながら着々と準備を進めて下さった実行委員メンバーに加え、学会本部のバックアップ、やましろ里山の会や京都大学防災研究所の研究室の学生の方々などの多くの関係者のご協力の賜物と存じます。

あらためて、ご参加いただいた皆様や大会運営に関わって下さった皆様に、深く感謝いたします。

応用生態工学会 普及・連携委員 (大阪) 山田 啓介



第 26 回京都大会実行委員会・大会運営メンバー

第 26 回京都大会 大会実行委員会

	氏 名	所 属
大会実行委員長	角 哲 也	京都大学
副 委 員 長	竹 門 康 弘	大阪公立大学
副 委 員 長	山 田 啓 介	八千代エンジニアリング株式会社
実 行 委 員	池 田 欣 子	アジア航測株式会社
(五十音順)	石 田 裕 子	摂南大学
	市 守 大 介	株式会社ウエスコ
	小 川 芳 也	大阪工業大学
	沖 野 友 祐	アジア航測株式会社
	加 瀬 瑛 斗	パシフィックコンサルタンツ株式会社
	川 越 幸 一	株式会社建設環境研究所
	小 林 草 平	京都大学
	重 吉 実 和	中央復建コンサルタンツ株式会社
	杉 山 智 治	日本工営株式会社
	厨 子 和 典	株式会社修成建設コンサルタント
	瀬 口 雄 一	株式会社建設技術研究所
	瀧 健 太 郎	滋賀県立大学
	武 本 大 輔	国際航業株式会社
	谷 田 一 三	大阪公立大学
	津 下 麻 樹	いであ株式会社
	土 居 秀 幸	京都大学
	富 松 啓 太	株式会社建設環境研究所
	中 井 克 樹	琵琶湖博物館
	林 宏 樹	八千代エンジニアリング株式会社
	兵 藤 誠	いであ株式会社
	藤 谷 俊 仁	株式会社建設環境研究所
	藤 原 宣 夫	大阪公立大学
	村 上 伊 佐 弥	フィールド環境株式会社
	梶 谷 隆 志	水資源機構 木津川ダム総合管理所
	森 博 隆	株式会社オリエンタルコンサルタンツ
	八 重 樫 咲 子	山梨大学
	山 下 博 康	株式会社ウエスコ
	渡 辺 敏	株式会社ウエスコ
学 会 本 部	天 野 邦 彦	幹事長, 河川財団
	佐 藤 元 樹	事務局長
	吉 村 千 洋	表彰担当幹事, 東京工業大学
	久 加 朋 子	表彰担当幹事, 富山県立大学
	沖 津 二 朗	情報サービス委員, 応用地質株式会社

4 2023 年度海外学会参加報告

徳島大学大学院 社会産業理工学研究部 佐藤 雄大

この度、2023 年度海外学会派遣助成制度によるご支援を頂き、8 月 21–25 日にかけてオーストリア、ウィーン市内で開催された 40th IAHR World Congress (IAHR: International Association for Hydro-Environment Engineering and Research) に参加いたしました。本誌面をお借りして、ご報告いたします。

1. 学会の概要

IAHR は、195 ケ国 5000 人以上の会員からなる組織で、隔年で World Congress を開催しています。今年の World Congress は、タイトルに「Rivers—Connecting Mountains and Coasts」を掲げ、現在と将来の水環境工学の課題に取り組むうえで重要な水循環に注目し、最近の知見や経験、技術を共有するとともに、研究者や政策決定者が世界の水環境問題について議論する機会の提供を目的に開催されました。学会会場は、ドナウ川に面し、ウィーン国際センター(国連事務局)も隣接する Austria Center Vienna です(写真 1)。ウィーンは、水道水をそのまま飲めるほど水質の良い街でもあり、水環境がテーマの学会としては理想的な会場と言えます。9 月 1 日付の IAHR からの公表によると、今大会は、98 ケ国からおよそ 1400 名もの参加者が集ったとのことでした。

本学会では、主題として 8 つの key トピックが設けられており、各トピックはさらに細分化された 4–6 つのセッションで構成されています。各トピックはそれぞれ、(1) River Research and Management, (2) Deltas and Coastal Engineering, (3) Sediment Transport and Morphodynamics, (4) Integrated Management of Extremes, Climate Change, (5) Environment and Society, (6) Urban Water and Water Industry, (7) Hydraulic Engineering and Water Management, (8) Computational and Experimental Methods となっています。



写真 1. ドナウ川（左）と学会会場となった Austria Center Vienna（右）。

2. 研究発表

本学会で私は、Environment and Society 分野の「Ecological Status and Eco-engineering」セッションにエントリーし、「Importance of dam reservoirs for bats as foraging habitat」というタイトルで口頭発表を行いました(写真 2)。本研究は、徳島県南部を流れる那賀川上流域で音声録音装置を用いたコウモリの活動量調査を行い、ダム湖とダム下流河川でその違いを比較したところ、水位変動幅の小さいダ

ム湖で、一部種群の活動量が高いことを明らかにしました。質疑では、コウモリの活動量がダム湖によって異なるという結果に対し、ダム管理方法の違いについて言及した質問を頂くことができました。なお、学会に先立ち、本研究成果は、Proceedings of the 40th IAHR World Congress (査読付論文集)に投稿し、受理されました。

私の発表は、学会最終日でセッション最後の演題ということもあり、参加者は少なかったものの、セッション終了後には、Sejong University (韓国) の Hyoseop Woo 博士より、今後の研究展開 (コウモリの餌資源調査の必要性) なども含め、直接助言を頂くことができました。



写真 2. 口頭発表中の様子。

3. 学会で学んだこと

生態水理学的 (ecohydraulics) アプローチ

昨今、応用生態工学の分野では広く普及・活用されているようですが、動物の行動研究に取り組んできた私にとって、河川の流れや土砂動態を、数値シミュレーションなど水理学的手法で可視化するアプローチは、研究の視野を広げる良い機会となりました。そのような技術を駆使した研究として、「Ecohydraulics in rivers and coasts」や「Hydropeaking in regulated rivers」, 「Advances in sustainable hydropeaking management: Ecological needs and implications」のセッションでは、興味深い発表を聴講することができました。例えば、魚類 (特に多かったのはサケ科魚類) の生息・遡上に適した河川環境の創出を目的に、河川の現状を評価したもの、自然再生事業など改変によって物理的特性がどう変化したかを分析したのが見受けられました。ただし、実際に魚の応答まで同時に調べた研究は少ない印象でした。今回聴講した研究の多くは、対象生物の選好するハビタットの特徴が事前情報としてある程度得られており、それに対して現状の河川環境がどうなっているかを評価することに重きが置かれているようです。

今後、温暖化や土砂災害など、河川環境に生じた変化が、周辺の陸域に生息する生物群集に及ぼす影響を理解する上で、上記のような生態水理学的アプローチも応用できればと考えています。

ドナウ川の河川工学統合プロジェクト

今回の World Congress におけるメインイベントの一つとして、Technical Visits (エクスカーション) があります。Technical Visits には 5 種類の見学先が用意されており、参加者はそのいずれか一つに参加できる方式となっていました。私は、ドナウ川で実施されている「Integrated River Engineering Project: Catalogue of Measures for the Danube to the East of Vienna」の現場を、遊覧船で見学するツアーに参加しました。ツアーは、会場近くの船着場から東へ 50 km ほど、Freudenau 水力発電施設や, Donau Auen 国立公園内を通過しながら、スロバキアとの国境付近に至るまで約 3 時間の船旅でした (写真 3)。

ドナウ川では、写真 3D に示すように比較的大型の船舶が日常的に航行するため、流路の維持にお

いて、水制（写真 3A）や重機による掃流土砂の管理（写真 3C）が重要な役割を担っています。また、同プロジェクトの特色として、Donau Auen 国立公園内を中心にサイドアームを復元し、氾濫原としての機能を広範囲にわたって再生しようとする試みも挙げられます。生物の生息地保護、航路の維持、水資源確保、洪水対策といった、河川管理に係る統合的な取り組みを直に見ることができたのは、貴重な体験となりました。



写真 3. ドナウ川における Integrated River Engineering Project の現地視察。(A) 石積みの水制（矢印）。同様の水制が数多く設置されています。(B) Donau Auen 国立公園に面した河畔林と、石積みで囲まれた止水帯。岸際の浅瀬や砂州には、水鳥が集団営巣地を形成するようです。(C) 河道内に堆積した土砂を掘削する重機。(D) 観光客を乗せた大型の遊覧船。

4. おわりに

今回は World Congress ということもあり、研究分野は多岐にわたり、同時時間帯に 8 つものセッションが同時展開されるなど、同学会の裾野の広さを実感するものとなりました。一方、私のように生物寄りの視点からの研究発表は、比較的少ないようです。あるセッションで、ノルウェーの魚類研究者が、「私は生物学者だけど、みなさん最後まで見捨てないでね」とジョークを交えていたのは印象的でした。これまで、生物系学会への参加が中心でしたが、IAHR のように、河川工学や水理学といった分野の研究者と交流の機会を得られたことで、新たな気づきを得ることもできました。ドナウ川で見た Integrated River Engineering Project のように、自身の研究も、多方面からの見方を統合するよう

なものへ発展できるよう、今回の経験を活かしていきたいと考えています。

このような機会と経験の場を与えて下さった応用生態工学会の皆様には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

最後に、IAHR とは直接関連しないものの、帰路で見かけた光景をご紹介しますと思います。写真 4 は、オーストリアの農村部郊外に広がるウィンドファーム（風力発電施設）です。日本でも再生可能エネルギーの一つとして導入の進む風力発電ですが、その多くは沿岸部や山間部の尾根上での建設が大半を占めます。欧州では写真のように、農地景観での建設が多いのも特徴です。再エネとして重要な役割を担う風力発電ですが、一方で、鳥類やコウモリ類の衝突事故が各地で多発していることから、その対策や事故を未然に防ぐためのアセスメント手法開発が求められています。現在、私自身がコウモリを対象とした環境アセスメント手法開発の研究に従事していることもあり、思いがけずではありますが、先進地の光景を目の当たりにできたことも、印象に残る経験となりました。



写真 4. オーストリアの風力発電施設. 農村部に多数の風車が建設されており、ドナウ川のツアー中も、所々、船上から風車群が垣間見られました。近い将来、日本でも同様の光景が広がるようになるのかもしれません。

5 行事開催報告

5-1 連続セミナー 第9回「未来の環境を語り・考える会」

日 時：令和 5 年 7 月 27 日（木） 16:30～18:30

場 所：アクセア麹町 9 階、第 1 貸会議室

応用生態工学会事務室（意見交換会）

参加者：会場参加 賛助会員 14 名

WEB 参加 賛助会員・正会員 77 名

意見交換会参加 賛助会員・事務局・講師 計 12 名

司会：応用生態工学会企画運営委員 浅見 和弘

応用生態工学会では、賛助会員をはじめとする会員の皆様が、環境に係る行政や学識者と意見交換を行い、日ごろの事業や研究、将来の国土保全に役立てていただければと考え、平成 27 年 12 月より連続セミナーを開催しています。今回は第 9 回のセミナーとなり、国土交通省水管理・国土保全局河川環境課舩田直樹技術調整官をお招きし、「河川環境の整備・保全、河川行政が建設コンサルタントに望んでいること」についてご講演いただきました。

【概 要】

司会から令和 5 年 4 月に着任された舩田技術調整官をご紹介した後、舩田調整官より、約 90 分間のご講演がありました。主なご講演内容を列挙します。

(1)気候変動の影響と流域における適応

(2)多自然川づくり ～全ての川づくりの基本～

(3)河川環境の変化と河川環境施策の変遷

(4)持続性ある実践的多自然川づくりに向けて

①河川環境管理シートによる目標設定

②大河川 Q A など技術資料

③多自然川づくりに関する人材育成

④地域と連携した多自然川づくり

⑤河川水辺の国勢調査

⑥河川 C I M の活用

⑦環境 D X の推進

⑧河川生態学術研究会

⑨生態系ネットワークの形成

ご講演に続く質疑応答、意見交換では、これらを題材として活発な議論、情報交換が行われました。



講師 舩田直樹技術調整官



会場風景

6 理事会・幹事会報告

6-1 第 127 回理事会・第 101 回幹事会合同会議 報告

第 127 回理事会・第 101 回幹事会合同会議が本年 9 月 22 日に開催されました。

なお、これに先立って行われた第 26 回総会において第 14 期役員等が承認されたことから、退任役員の所掌を補充する指名が行われました。

第 127 回理事会・第 101 回幹事会合同会議での主な審議は次のとおりです。

1. 審議事項

1-1 副幹事長の推薦・任命

幹事会において、石田幹事が副幹事長に推薦され、会長より任命された。

1-2 会長職務代行者の指名

理事会において、会長が清水副会長を会長職務代行者に指名した。

7 2023 年度行事の経過と今後の予定

2023 年度行事の経過と今後の予定

4 月	2023 年度（令和 5 年度）開始 4/11 法人化等 WG 4/12-18 第 122 回理事会(メール会議) 4/13 第 14 期次期役員募集・推薦委員会(第 1 回)
5 月	5/9 企画運営委員会 5/17 法人化等 WG 5/26 第 98 回幹事会 5/26 ニュースレター101 号発行
6 月	6/1 法人化等 WG 6/21 第 123 回理事会
7 月	7/4 法人化等 WG 7/6 第 14 期次期役員募集・推薦委員会(第 2 回) 7/21 第 99 回幹事会 7/25 第 14 期次期役員募集・推薦委員会(第 3 回)
8 月	8/3 法人化等 WG 8/9 ニュースレター102 号発行 会誌「応用生態工学」Vol.26-1 発行 8/31 第 124 回理事会
9 月	9/20-23 応用生態工学会第 26 回大会（京都大会） (京都大学宇治キャンパス) 9/20-9/22 口頭発表、自由集会、ポスター発表、公開シンポジウム 9/22 総会、理事会・幹事会合同会議、各委員会を開催 9/23 エクスカーション
11 月	11/7 法人化等 WG 11/20 第 102 回幹事会
12 月	12/5 第 128 回理事会 一般社団法人定款(案)パブリックコメント実施 12/8 ニュースレター103 号発行
1～2 月	第 103 回幹事会 第 129 回理事会 2024 年度海外学会等への派遣員の募集
3 月	ニュースレター104 号発行 会誌「応用生態工学」Vol.26-2 発行 2023 年度（令和 5 年度）終了

8 事務局より

8.1 住所等の連絡先変更は「会員登録情報変更フォーム」にてお願いします

1. 会員情報の変更登録は、学会ホームページトップ画面右上の「入退会・登録変更・購読」バナーから入り、「会員登録情報変更フォーム」に入力し送信してください。
2. 下記 URL で「会員登録情報変更フォーム」へ直接接続することもできます。
<https://www.ecesj.com/FS-APL/FS-Form/form.cgi?Code=change>
3. 会員情報変更のご連絡は、学会事務局 eces-manager@ecesj.com にメールをいただくことでも可能です。

会誌(希望者のみ)のお届け、ニュースレター、その他の連絡では、かなりの「不達が発生」しています。

よろしくお願いいたします。

8-2 退会の申し出は「退会フォーム」にてお願いします

退会の申し出については、事務局の見落とし等をさけるため、①「学会ホームページ退会フォーム」または ②「事務局あてに退会の連絡メール」により連絡をお願いいたします。

8-3 会員数の比較

2023 年 11 月 30 日現在会員数

	会員数	対前年度比較
名誉会員	10 (10) 名	名
正 会 員	861 (877) 名	減 16 名
学生会員	119 (95) 名	増 24 名
合 計	990 (982) 名	増 8 名
賛助会員	47 (46) 法人	増 1 法人
	66 (65) 口	増 1 口

()は 2023 年 3 月 31 日の会員数